# 私小説

◉

作　島川柊

〈上演データ〉

第十六回せんがわ劇場演劇コンクール出場作

一人芝居ミュージカル『私小説』

二〇二六年五月二十三日　於 調布市せんがわ劇場　上演

〈出演〉

主演・・・井坂茜

〈演奏〉

ピアノ演奏・・・久野飛鳥（東のボルゾイ）

〈製作〉

作・・・島川柊（東のボルゾイ）

作曲・・・久野飛鳥（東のボルゾイ）

演出・・・大舘実佐子（東のボルゾイ）

舞台監督・・・山田剛史

音響・・・宮﨑裕之（predawn）

照明・・・大平智己

演出部・・・須田遼太郎（東のボルゾイ）

衣裳・美術デザイン・・・東のボルゾイ

美術 字・・・井坂茜

**戯曲の複製、転載、転用、改変は、禁止いたします。**

――　明転。舞台中央、一人分の机と椅子がある。女が座っている。ふと自分の右手を見る。真っ赤に塗られている。何故こうなったのかを思い出そうとするが、掌を閉じると、自分がたった今何かを思い出そうとしていたこと自体を忘れる。腕を組んで、足を組んで、凛々しく話し出す。

「状況を整理するいい機会だと思う。
私のあんたに対する長年の疑念、というか懸念。この子はどうしようもない人間なのかもしれない。という懸念。これは、もう事実ということでいいのかしら。
何度もそう疑っては、いいや、そんなはずがない。この子はこう見えてやるときゃやる。こう見えて、ここぞって時が来たら、だって血を別けた・・・
いや、違うわ。どうしようもない人間、て言い方じゃ漠然としてるわね。
この子は、なんというか、この子は、・・・舐めている。
そう、舐めている。舐めてんのよ。だから腹が立つ。だから気を揉む。
あんたは、生まれてこの方、とにかく舐めていやがるのよ。
ね？ そういうことでもういいのかしら？ どうなのかしら？
聞いてんのかしら!?」

――　声を張り上げた直後、気の抜けた表情になる。

姉は、大体そんなようなことを言ったと思います。もっと、途中に、ブスとかカスとかスカタンとか、寝言は寝て言えこの気狂いが、とかキレのある罵倒がごろごろ出てきたような気もしますが、なんかちょっとあんま憶えてないス。
要約すると、テメェは舐めた人間てことでいいな？ という話だったと思います。こういう質問を叩きつけられた時の、最適な一つ目の返答は、
「どういうこと？」

これです。どういうことかを、今散々言ってたんだろうがよってね。ただ悪戯に、猶予を延長するためだけの質問返し。スカタン界隈はついつい多用してしまう魔法の言葉。いや、これも多分、寝て言うべき寝言。だけど言いましょう。持ち得る限りの演技力でもって、イノセントぶった顔と声で訊きましょう。

「どういうこと？」

そうすると、姉は、片方の眉をぴくりとさせた。ほう、眉毛か。次は小鼻を狙うぞ。そうです、私の趣味は、姉に微量のストレスを断続的に与え、姉の顔のいろんな部位を痙攣させることです！　そうだ、震えろ。もっと震えろ。震えてそのままゼリーになれ。

――興奮を押し殺して、

姉が、状況を整理する、とかなんとか言った時。なんだか探偵みたいな言い方すんなあ、と思った。乗客集めて、犯人を発表する気ですか。でもしばらく経って、優しいんだなあ、と思った。

あの時本当は、「人生」と言いたかったはず。「人生を整理するいい機会だと思う」妹をブスと呼ぶことができても、妹に人生を突きつけることはできない。温かく、繊細で、臆病な心の持ち主。・・・だからきっと姉は、愛される人です。

――机に頬杖をついて、息を吐く。

はあ、生まれながらにして、人と生きていく機能が備わってんだ。生まれながらにして、人は一人では生きていけないことを知ってんだね。その本能は、生き物として美しく、人間として逞しい。だって人間は、コミュニティってやつの中で暮らす生き物ですからね。人の気持ちが分からなくちゃいけない。

そうです、私、学が無くはないんです。丁度ウザい程度にあるんです。

姉は、中学生の頃、痴漢に遭ったことがありました。門前仲町駅の、地上へ上がるエレベーターの中だった。このことを姉は、両親に決して言わなかった。私に打ち明けてきた時も、やけに派手な笑い声を上げながら、イチモツを露出した男の間抜けさについて、他人事のように話していました。

同情されること、自分ではなく人が心を痛めることを、何よりも恐れておいでなのだ。私はその必死な姿を見ながら育ちましたから、そういう時は姉に調子を合わせて、ピッタリ同じ声量で笑ってやることが上手くなりました。乗ってあげなくちゃ、あまりに惨めだから。

――取ってつけたように微笑んだ後、髪を耳にかけながら、

私だって、人の痛みが想像できないわけじゃない。むしろ、得意な方だと思ってる。被害を、親にはひた隠しにした姉の気持ちが、痛くわかるもの。同じ状況になったら、私も同じく、言わないと思う。

でも違うのは、私は、目の前の人間に打ち明けられないことほど、文字にしてしまう。台詞にしてしまう。舞台の脚本に丸ごと書いて、上演してしまうのです。そんで私なら、エレベーターの中で犯されたって書いちゃうかもね。癖（へき）が捻じ曲がって女王様になったとまで書いちゃうかもねっ。

だってジンセーなんてのは、物語にでもしないとてんで意味がない。盛って、編集して、娯楽になってはじめて意味を持つと、生まれながらにして、思い込んでいるのです。この身に降り注いだ、というかこの身から出た、事件、病気、喧嘩、失恋、借金、失禁、出禁。

――目が輝く。

みっともないのから順にご披露したい。なんなら人から聞いた話も垂れ流して、巻き添えを喰らわしたい。ゲリラ的に付き合わされた皆さんの、ショックや動揺が堪らない。人間として、日々お世話になっているはずの、コミュニティってやつを荒らさずに過ごす術がわからない。意味もわからない。

でもなあ、同じく様子のおかしい誰かがどっかで、ブッ、と笑ってくれたりして、って期待しちゃってんだよなあ。そうやって、なんか、なんでか、赦してもらえないもんかな。・・・あ、そうです、私は舐めた人間です。

でも、お話を書く人なんてみんな、そんなもんでしょう？

--- 机に両手をついて身を乗り出す。

「ちょっと、ちょっとってば！ 聞いてんのあんた」

「は、もちろん、もちろん聞いていますとも。あの、あれだよね、姉ちゃんほら、あのほら、ね」

「まったく。いいこと？ 物書きなんてのはね、道楽者のすることですよ。男だってそう言われるのに、増してや女が」

--- 机の端に転がっていたペンをとって、鼻の下に挟む。

「へへっ、男が女がって、いつの時代の話だよ」

---素早くペンを外し、妹の目を潰すかの勢いで、宙を指す。

「いつの時代もよ。世間は目まぐるしく変わっているようでその実、大筋、何にも変わっていないのよ」

「え、でも」

「あんた、考えてもみなさいよ。動物の進化に、いちいちどれだけの時間をかけてきたことか。私達はコンピューターじゃないのよ。百年や二百年じゃ、何にも変わらないわよ。あんた、演劇をやってるのに、そんなことすら見抜けないの？　だから自分のことばっかりなのよあんたは。自分のことばっっっかり。まったく。」

――顰めっ面でお茶を飲む。

「やっぱりね、やってけないと思うわよ。私は。
薄ぼんやりと生きている人間が、やってはいけないものだと思うわよ。私は」
姉はそう言いました。
さてと。

――羽織っていた上着を脱ぎ始める。

あれ、どした、急に脱ぎ出して。まさかこの窮地にリラックスしてるの？　なんてお思いかもしれませんが、今ですね、今、マクラが終わったんですね。

――背もたれに上着を掛ける。打って変わって、客席に話しかける口調になる。

それではここで、一席申し上げましょう。どなたもご存知でいらっしゃると思います、樋口一葉、という作家。五千円札の顔として有名ですね。新札が出ましたから、あの五千円札はだんだん減っていくんでしょうが。
代表作は『たけくらべ』でしょうね、お読みになったことがある方はおわかりになると思うんですけど、これがなかなか読みにくい。ね。出出しが、「廻れば大門（おおもん）の見返り柳いと長けれど、お歯ぐろ溝（おはぐろみぞ）に燈火（ともしび）うつる三階の騒ぎも手に取る如く・・・」

なーんか、古語みたいな文体なんですよね。正確には、雅文体（がぶんたい）とか、擬古文というらしいんですが。私はようわかりません。見返り柳って何みたいな。お歯ぐろ溝、もっと何。仕方がないってんで、出てくる言葉をいちいちネットで検索しますわね。たけくらべ読んで、知恵袋引いて、たけくらべ、知恵袋、たけ、知恵くらべ、たけぶくろ。

往復しているうちにバナー広告の漫画が気になり出しちゃって、はたと気づくと、子猫に転生したおじさんの話に夢中になってたりしてね。しない？

それくらい、読もうと思うと、幾分骨が折れる。

――両手を膝の上で重ねる。

それでも私は、この樋口一葉という人が好きなんですね。人が、好きなんです。

一葉は、二十四の若さで亡くなるんですが、彼女が初めて原稿料を受け取ったのが二十一歳の時。つまり、作家として物を書いた期間は、三年足らずなわけです。

中でも「奇跡の十四ヶ月」なんて呼ばれている期間がありまして、先ほど申し上げました『たけくらべ』の連載をしながら、その合間に『ゆく雲』を発表して。その後も、『うつせみ』『にごりえ』『十三夜』と毎月のように小説を世に出し、僅か十四ヶ月のうちに、十一作品も執筆したっていうんだから驚きますよね。それを知ると、見慣れた五千円札のお顔つきも、気合いが桁違いに見えてくるっていうかね。

特に、あの森鴎外が、一葉の才を高く買っていたそうです。文壇の仲間として、彼女の早すぎる死がとっても悲しかったんでしょうね。亡くなった時に、「葬儀には、陸軍の軍医総監である本名の森林太郎として、馬に乗って参列させていただきたい」と申し出て、一葉の家族にスパッと断られたりしています。

他にも、とんでもなく貧乏な暮らしであったこと、吉原の近くに住んで玩具屋をやっていた時期のこと、女は学が無い方がいいって時代に、頭が良すぎてしまったことなど、その人生そのものが物語として大変面白いですから、お暇な時にぜひお調べになってみてください。

――一息ついて、

ま、そんな数ある一葉伝説の中で、本日私が申し上げたいのは、

――左手にペンを持ち、右手は掌をひろげ、両手でバタンタンと机を叩く。

一葉、いや本名・奈津の、ある恋についてなんですが、

――また叩く。

樋口奈津、十九歳のこと。半井桃水という男に出逢います。東京朝日新聞に大衆小説を書く、当時評判の小説記者でした。以前より小説を書きたかった奈津は、妹のツテで知り合ったこの桃水に、小説の書き方を習うことにいたしました。

――一気にもじもじとする。

「あのもし、半井先生。大変不躾な頼みとは存じますが、その、」

「なんです。言ってご覧なさい」

「ええ、その、ああ何から申し上げたらいいやら」

「思い浮かんだ順にお話しなさい」

「はい、私、その、上手くお伝えできるかどうか」

「わからなければわかるまで聞きますから、ご安心なさい」
「ありがとうございます、では、その、あの、その、・・・はああん申し上げづらい！キャア！」
と顔を覆ったり叫んだりして慌てふためくばっかりで、ちっとも本題に入らない。
普段の奈津は、こんな鬱陶しい女じゃあないんだが、一体どうしたものか。
よく見ればこの半井桃水、なかなかの器量良し。スッと通った鼻筋と立派な肩幅が男らしく、それでいてどこか少年のような、懐かしくて素朴な眼差しをしている。
そして何と言っても、この穏やかさ。

――― 湯呑みを差し出しながら。

「キャア、ですか。大丈夫ですか。ほら、お茶をお上がんなさい。深く息をお吸いなさい。あっ、止めちゃいけない、お吐きなさい。そしてそろそろちゃんとお話しなさい」
顔も心根も端正な、いい男だ。十九の奈津には、桃水三十一歳の落ち着いた物腰が堪らなかった。ポーッとしてしまうところを、いかんいかんとかぶりを振って、

――― 姿勢を正す。

「頼みというのは、半井先生、私に小説をご指南いただけませんでしょうか」
「言うとなったらさらっと言うのですね。小説。書き方を、ですか」
「はい。先日歌塾の、萩の舎の姉弟子、田辺花圃さんが小説をお書きになったんですけれど、その稿料が三十円だったと聞いたものでして」
「人の賃金もさらっと言うのですね」
「半井先生」

――奈津は、桃水をまっすぐ見る。

「なんです」

「私、お金が要るのです。母と妹を養わねばならぬのです」

実はこの時、樋口家、大変な生活苦に陥っていた。

事の発端は、二番目の兄、虎之助の素行の悪さ。なんでも、家の物を勝手に持ち出しては、軒並みメルカリで売り飛ばす。家庭内泥棒なのであった。見兼ねた父則義は、虎之助を勘当する。奈津が九つの時だった。

――机を叩く。

一方、長男の泉太郎は則義に似て、利発で真面目な気性。勉学に励み、大蔵省に入った。ところが、勤め始めて一年も経たぬうち、肺結核を患い死んでしまう。

（叩く）則義は、長年勤めた警視庁を辞めたところだった。泉太郎が大蔵省という、政府の安定した勤めへ就いたもんだから、一家はすっかり安心していたのだ。すでに家督も譲っていた。こうなった今、自動的に奈津が、父則義を後見人に、相続戸主となる。（叩く）奈津、十六歳でまさかの世帯主である。

泉太郎の死後、則義は家を売ったその金で、運送会社の設立事業に出資し、どうにか稼ごうとする。しかし事業はすぐさま頓挫、（叩く）話を持ちかけてきた知人はトンヅラ、（叩く）膨大な借金だけが残ってしまった。そしてその直後（叩く）、この不幸続きだ、心労が祟ったのだろう、（叩く）則義が病に倒れ帰らぬ人となる！（激しく叩く）痛ッテ〜。

――右手を冷ますように振り、掌を見る。赤い。合点のいった顔をする。

ああ、叩き過ぎたんだ。それでこんなに。

――― 照れくさそうに、両の掌を擦り合わせる。

兎にも角にも、奈津は十七歳にして、母と妹との生活、そして父の借金を全て背負うこととなってしまった。

ところで桃水は、自身の日記に、この日の奈津の第一印象をこう残している。

――― 机にペンを走らせる。

「着物の縞の柄といい、色合いといい、なんかババァ、あ、いや、年寄りめいて見えた。結った髪もボリュームがなく、飾りもつけていないから、大層淋しく見えた」

年寄りめいた、とは十九の娘にとんだ言い草だが、それほどまでに奈津の格好は貧しく、疲れていた。一方奈津は、死後に出版される『一葉日記』に、桃水との出逢いを、こう書いている。

――― ペンを持ち直し、机に突っ伏す。はたと顔を上げる。ピアノが鳴る。

あ、奈津はド近眼だった。そのせいで、この頃慢性的な頭痛と肩こりが酷かった。

――― こめかみを押さえながら、机に視線を戻す。声に出しながら書く。日記は歌になる。

先生は　いと色白で
いと穏やかで
微笑んだ様子は
三歳の子供が
あっという間に懐くくらい
いと、いと、素敵でした

――― 伴奏が止まり、姿勢を戻す。

そんなわけだから、奈津は初対面からすっかり桃水に夢中だった。少々衝撃的な身の上話も、桃水が聞いてくれていると思うと、なぜだか嬉しくて、ご機嫌なマシンガントークとなった。

――― 奈津は早口に話す。

「それでね、一時は分家した虎兄さんのとこへも行ったんですが、元より母と折り合いが悪かったでしょう。ドメスティック泥棒でしたし。DVならぬ、DDですよっ。今更一つ屋根の下で暮らすなんて到底できませんでしょ、DDが出て行ってくれーと怒鳴るものですから、また母と妹を連れて、」

「もうよい。もう、よい」

――― 桃水は目を閉じて、目頭を抑えた。涙が滲んでいるようにも見える。

「あっ、ごめんなさい、つい話し過ぎて、」

「奈津さん、私でよいのなら、力をお貸ししましょう」

「・・・本当ですか」

「あなたのご苦労を聞いて、知らぬふりをできる者がいましょうか」

「ありがとうございます。ありがとうございます。そんなら私に、」

「ただね、物書きは道楽者がすることですよ。世間からそう言われます。男の私で言われるのですから、あなたは尚更。別の、真っ当な稼ぎ方をお考えになった方がいい。私も手立てを探しますから、」

「半井先生」

「なんです」

「私、学がないのですよ。今も母と仕立ての仕事なんかをしていますけれど、毎日縫ってひと月四円。親子三人、生活費だけで月に七円はかかります。その上借金がある。四円の仕立て賃じゃ、いや学のない女のできる職じゃあ、うちには到底足りないのです、半井先生！！」

「なんですう！」

――奈津はお茶をゴックと飲む。

「っあー。先生。私は、書きたい物があるわけではございません。世間様に申し上げたいことがあって、物書きになろうというのではないのです。」

――奈津はどこか笑っているように見える。

「ただひたすらに、三十円の稼ぎを狙って、生活のため、物書きになるのです」

――きらりと前奏が鳴る。上着を羽織り直す。腕は通さず、肩にかける。

あの日から、

――喋りは徐々に歌になる。ペンをとって、書き始める。

十月（とつき）が経って
ある寒い朝
外を見ながら
行くべきかどうか　どうしたものか

――― 顔をあげ、空を見上げる。ぽつぽつ、ピアノの音が降っている。強くなっていく。

みぞれまじりの雨
雪になる　みんなが言う
よし、なるならなれ
傘をさす　会いにゆく

――― 立ち上がる。歩き出す。

ほら真砂町から壱岐殿坂（いきどのざか）へ
堀端（ほりばた）通りは先まで真っ白
やっとの思いでついた門口
戸の向こう　いびきが聞こえる

――― 戸を叩こうとした手を止めて、耳を澄ます。

おかしな気持ちが迫りくる
ずっとこうしていられたらいいのに　ずっとずっと

――― 水が流れ込むような間奏。しばらくして、跳ねる音色に変わり、

二時間経って
あなたが起きる
謝りながら
起こせばいいのにと　笑いながら

とうに噂になっている
はしたない　みんなが言う
あ、お餅が焼き上がる
食べなさい　あなたが言う

紙入れ、番付、書きかけの原稿
雑誌のこと　止まない雪のこと
散らかる部屋に溢れていく
今日はもう　あまりにいっぱい

―――　幸せそうだった奈津は、途中今にも泣きそうになり、それもすぐに通り過ぎ、わくわくとした顔になる。上着の襟を立てる、その後、それでは足りず、頭から被る。

泊まっておいきというのを　断って帰る雪の道
すっぽり被った頭巾から　目だけを出している私
この格好も　この寒さも　おかしくておかしくて
あのいびきも　あたたかさも　おかしくておかしくて

―――　駆けるようだった伴奏が立ち止まり、空に突き抜ける。ペンを握り、また日記を書き出す。

知らない気持ちが迫りくる
ずっとこうしていられたらいいのに
ああ次々にお話が浮かんでくる
ずっとこうしていられたらいいのに　ずっとずっと

――― ペンを置いて、丸めた両手の中にふうっと息を吹き込む。手を手で包んで温める。また息をかけながら、掌を見る。赤い。

はあ、霜焼けになっちゃった。ほら。

――― 掌を客席にパッと見せた後、握ったり開いたりする。ゆっくり転がっている音楽が、もうすぐ止まるのを嬉しそうに待つ。ピアノの最後の音が止まる。

まあ、奈津、いや一葉は、桃水との噂が作家活動の足を引っ張るからと、この恋、潔く諦めてしまうんですけどね。生活があまりに苦しくて、恋愛どころではなかったのだろうと思います。

いや、一葉は、たった一瞬の高鳴りを永遠の物語にする力を持っていたから、かもしれない。

桃水の家を訪ねたあの日の一年後、『雪の日』という小説を発表します。雪の降る日に、ある娘が、家族とふるさとを捨てて、小学校時代の先生と駆け落ちをするお話。あまりに正直に、プライベートを、そしてほんのひと時見た夢を、物語にしているでしょう。

だから私は、樋口一葉という人が好きです。

――― 手を温めるついでに、湯呑みのお茶を飲む。表情が曇り、言いにくそうにする。

だから姉ちゃんは、姉ちゃんの言うことはいつも真っ当なの、わかってるよ。私は舐めてるし、薄ぼんやりとしているし、やってはいけないことをやってけると勘違いしてここにいるのかもしれない。

大体全部合ってんだろうけどね、人生を整理するいい機会、これだけは違う。そんな機会無いよ。あってはならないの。

整理できちゃったら、書くことがなくなって、やることがなくなって、いよいよ人間ゴミになっちゃいますよ。部屋は散らかってる方がいいんだ。

――口調が強くなってくる。

今日姉ちゃんがこうして、はるばる物言いを付けに来てくれたのもね、私はすーぐお話にしますよ。もう頭の中でほとんど組み立ってっからね。樋口一葉を引っ張り出して、講談にして、途中ミュージカルにして、無闇矢鱈と派手にやってやろうって思ってますよ。

今日のことも、姉ちゃんの人生の中では、派手に笑いながらじゃないと人に話せない出来事になるでしょ？　あの時みたいに。それくらい恥ずかしいことで、お母さんを悲しませることでしょ？　わかってるよ。だからやってあげるよ。娯楽にして、みんなのものにしてあげる。

――完全に勝った顔をしている。

悪いけどね、自分の痛みとろくに向き合えず、他人を傷つけるのを恐れる、至って普通で素晴らしいあなたを、生かすも殺すも私次第なんだよ。だって、姉ちゃんなんかいないから。

――姉ではなく、客席に話し出す。

私に、姉はいません。うちの親はどうやら随分甘いようだ、この現代は親切で、どうやらこのままどこまでも、適当に生きていけてしまいそうだ。ある時そう気づいた私が作り出した、空想の姉です。

四六時中ボケながら生きていきたい私のための、理想のツッコミ担当です。現実的で、凡庸な、私の悲しい部分を凝縮させた存在です。姉の言葉も、体験も、トラウマも、臆病さも、実は全部私のものです。私が打ち明けて、私が慰めて、私が裏切って。ずっとずっと無駄な押し問答をしている。

人は一人では生きていけないこと、生まれながらにして、わかってるから。

空想の姉と喋り続けてもうどれくらい経つだろう。人に紹介したのはこれが初めてでした。

――　息を吐きながら、両手を擦る。肩の痛みを和らげようと、首を回す。ピアノが事態を追いかける。

なぜ今、紹介する気になったんだろう。これだけは、物語にしても面白がってもらえなさそうだから、書かないつもりでいたのに。こんなの共感されない。こんなの立派じゃない。こんなの感動させられない。

こんなの、はした金にもならない。わかっていたのに。

――　両腕をさする。

金のためと言って始めた執筆業だったけれど、いつの間にか、愉しさを覚えていたことを否定できません。皆さんとっくに気づかれていたと思うけど。

――　照れ笑いをしかけた途端、激しく咳き込む。口を押さえた右手を見る。赤い。

あ、血だったのか。

――　痛む肩を押さえて、解決してスッキリしたような声で言う。

そうか、目が悪いからじゃなかったのか。兄さんと同じか。そうかそうか。

――改めて掌を見て、

それは、ずっと昔、始めっからそうだったかのように、真っ赤に、張り付いていた。

――ペンを取り、突っ伏して書く。書く手が震えている。ピアノの音が震えている。

こうなることはとうに決まっていた。「どういうこと?」と、わざととぼける私を不憫に思った神様が、悪戯にお貸し下さった、猶予の人生だったとでも言わんばかりだ。おかしくなってくる。

そうすると、私が、物書きになることも、はじめから決まっていたことなんじゃないかと思えてきた。兄さんが死んだのも、父さんが死んだのも、母さんが歌詠み以外の勉学をさせてくれなかったのも、女の形が決まっている時代に生まれ落ちたのも、いつか、全部書くためだったんじゃないか。通りで、足りないものを想像するのが、得意だと思ったんだ。

金のため、生きるために書いた売り物の言葉は、この借り物の人生に意味をこじつけた。まるで面白おかしいみたいに。

そして本当に、面白くなってしまった。

――歌う。ピアノの音と一緒に、驚きでも喜びでもない、気づきを、一歩ずつ辿る。

恋は　美しくなってしまった
怒りは　歌になってしまった
世間に思いを　申し上げてしまった
伝わってしまった

――― 歌うのをやめる。ピアノの音が伸びていく。

私のことばっかり。私のことばっかり書いたはずなのに。

――― 全身ガタガタ震えながら、笑っている。音を置き去りにして、

そうだ。思い出した。

子供の頃、私は、子供の遊びなんか馬鹿馬鹿しいと思っていた。手毬も、羽根つきも、馬鹿にするなと思っていた。普通の人になんかならない。抜きん出たい。漠然と、でも確かに、そう思っていた。それが、叶うんだ。

私は、事実から抜きん出て今、物語になる。

――体の震えがピタッと止まる。机に倒れる。赤い右手がペンを握りしめたまま。暗転。

二〇二五年二月